

松江市立津田小学校（平成30年度、令和元年度）

1 研究主題

「自他を大切に、支え合い、ともに学び合う子どもの育成」

2 主題設定の理由

(1) 児童の実態

本校の児童は、全体的に明るく元気で、言われたことにはきちんと取り組む素直さがある。学校規模が大きく、日頃からたくさんの人と関わる機会が多い中、積極的に友達と関わろうとする児童が多い。しかし、人との関わりの中で、自分の思いをうまく伝えることができないため、時として人を傷つける言動も見受けられる。互いの違いや大切さを認め合う態度が十分であるとは言えない。

本校では平成29年度まで、「自分の考えをもち、ともに学び合う子どもの育成」を研究テーマに掲げ、算数科を中心に「一人一人が考えたことを自分の言葉で語る授業づくり」に取り組んできた。これまでの研究実践により、学習場面では目的意識と自分の考えをもって意欲的に学習に取り組もうとする態度が育ってきつつある。一方で、自分の思いが先行しすぎるが故に、友達の考えを聞き入れ、それも踏まえて自分の考えを導き出すまでには至っていない。したがって、友達と意見を交わし、学び合いながら課題の解決に向かっていく力はまだ十分育っているとは言えない。また、広く生活場面を見ても、一人一人が主体的に考え、互いに尊重し合って課題を解決し、行動していく力を高めていく必要があると考える。

以上のことから、研究主題に掲げる児童の育成をめざすためには、児童の人権感覚をさらに磨き、人権意識を高めていくことが必要であると考えます。

(2) 教育目標

本校では、児童の実態や保護者・地域の願い等から、次のような学校教育目標を設定している。

【学校教育目標】

『未来を切り拓く 心豊かなたくましい津田っ子の育成』

一人権尊重の精神を基盤とした、「知(確かな学力)・徳(豊かな心)・体(健やかな体)」

の調和のある教育活動の展開

この教育目標の具現化を図るためには、人権教育を全ての教育活動の基底に据え、互いのよさや大切さに気づく人権意識を育てること、ともに学ぶ喜びや高め合う充実感を味わわせながら、確かな学力、豊かな心、健やかな体を育むことが大切だと考える。

(3) 人権教育の目標

「人権教育の指導方法等の在り方について(第三次とりまとめ)」において、学校教育における人権教育の目標を次のように示している。

一人一人の児童生徒がその発達段階に応じ、人権の意識・内容や重要性について理解し、「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」ができるようになり、それが様々な場面や状況下での具体的な態度や行動に現れるとともに、人権が尊重される社会づくりに向けた行動につながるようにすることが、人権教育の目標である。

島根県教育委員会では、目標を達成するために、同和教育の成果である「進路保障」の理念を柱として人権教育を推進することを基本的な考え方としている。子どもの実態に目を向け、全ての教育活動で「進路保障」の理念に基づいた取組を推進していくことにより、自尊感情を高め、他の人を大切にしようという態度を身に付け、自他の人権を守ったり、様々な人権問題の解決に向けて主体的に行動したりすることができる子どもの育成が求められている。また、人権教育を進める視点として、次の3点を挙げている。

- ① 子どもたち一人一人の学びの保障（人権としての教育）
- ② 人権が尊重される環境づくり（人権を通じての教育）
- ③ 人権に関する知的理解と人権感覚の育成（人権についての教育）

これらのことを踏まえ、本校では、

- どの子にもわかる、どの子も参加できる授業を実践する
- 互いの個性を認め合い、安心して学校生活を送れる環境をつくる
- 人権に関する知的理解を深め、人権感覚を磨く

ことに重点をおいて本研究主題を設定し、これまでの実践を踏まえながら主題実現に向けて研究実践に取り組むこととした。

3 主題の受け止め

「自他を大切にする」 ⇒自分を大切にするとともに、他の人も大切にすること。

- ・自分のよさに気づき、自分を大切にしようとする。
- ・他の人のよさに気づき、他の人を大切にしようとする。

「支え合い」 ⇒他の人の思いや願いを受け止め、相手の立場に立って考え、行動すること。

- ・他の人のよさを認め、思いを尊重しながら、力を合わせて活動したり、よりよい関係を築いたりしようとする。

「ともに学び合う」 ⇒互いに思いや考えを出し合い、友達と関わり合って学ぶこと。

- ・課題や問題に対して、自分なりの思いや考えをもとうとする。
- ・自分の思いや考えを進んで表現しようとする。
- ・他者の思いや考えを自分の思いや考えと比べながら聴こうとする。
- ・互いに思いや考えを認め合い、学びを広げたり深めたりしようとする。

4 めざす子どもの姿（研究重点目標）

研究主題に迫るために、A「自尊感情」、B「共感的理解・他者尊重の態度」、C「伝え合う力」、D「主体的な行動力」を人権・同和教育重点目標（めざす子どもの姿）として掲げるとともに、観点別学年目標を設定して取り組む。

研究主題	重点目標	めざす子どもの姿
自他を大切に して、支え合い	A 自尊感情を高める	自分を肯定的に受け止め、自分のよさを伸ばそうとする子ども
	B 共感的理解を深める 他者尊重の態度を育む	他の人のよさがわかるとともに、その思いを受け止め、相手の立場に立って考え、行動することができる子ども
ともに学び合う	C 伝え合う力を伸ばす	互いに思いや考えを出し合い、友達と関わり合って学ぶ子ども
	D 主体的な行動力を育む	身近にある問題に気付き、自分のこととして考え、主体的に行動できる子ども



	低学年	中学年	高学年
A 自尊感情	自分のよさに気付く。	自分のよさに気付き、自分を大切にしようとする。	自分を大切にし、自分のよさを伸ばそうとする。
B 共感的理解・ 他者尊重	友達や身近な人のよさがわかり、誰とでも仲よくしようとする。	友達や身近な人のよさや思いがわかり、力を合わせて活動しようとする。	他の人のよさを認め、思いを尊重しながら、よりよい関係を築こうとする。
C 伝え合う力	人の話をしっかりと聴き、自分の思いや考えを伝えることができる。	相手の思いや考えを受け止め、自分の思いや考えをわかりやすく伝えることができる。	相手の思いや考えを尊重しながら、自分の思いや考えを的確な言葉で伝えることができる。
D 主体的な行動力	身近な問題に気付き、進んで行動しようとする。	生活の中にある身近な問題に気付き、自分のこととして考え、解決しようとする。	生活の中にある差別や偏見、不合理を見抜き、主体的に解決していこうとする。

5 現状の分析と課題

本校の子どもの現状については、先にも述べたとおりであり、人との関わりの中で、自分の思いをうまく伝えることができないため、時として人を傷つける言動が見られる。また、お互いの違いや大切さを認め合う態度が十分に育っていない面も見られる。

そこで、本校の子どもの実態をより明らかにし、つけたい力を明確にするために、以下の質問項目によるアンケートを実施した。

- ①自分には、よいところがあると思いますか。
- ②自分のよいところをのぼそうとがんばっていますか。
- ③声をかけてもらったり、親切にされたりして、うれしかったことがありますか。
- ④こまったときに、話を聞いてくれる友達がいますか。

- ⑤友達がいやな気持ちになることを言ったことやしたことがありますか。
- ⑥友達がこまっているとき、自分から声をかけたり、手伝ったりしていますか。
- ⑦まわりの友達のよいところやがんばっていることに気付いたことがありますか。
- ⑧学習問題や話し合いなどで考えていますか。
- ⑨先生や友達の話を最後まで聞いていますか。
- ⑩自分の考えや意見を話していますか。
- ⑪友達は、あなたの話を聞いてくれますか。
- ⑫よくないことをしている友達を見たら、注意することができますか。
- ⑬こまったことが起きたときに、自分で解決しようとしていますか。

アンケート結果より、下学年では、自己肯定感と学習意欲が高く、上学年では、友達のよいところに気付いている子どもが多いことが分かった。課題としては、下学年では、相談できる友達が少ないことや自己解決しようとする力が弱いことが挙げられる。上学年では、自己肯定感が低いことや思いやりをもって友達に接することができていないと感じている子どもが多いことが挙げられる。

地域としては、市街中心地に近く、人口は増加傾向にあるものの、周辺部から移住してこられる方も多くなっている。したがって、PTA活動や地域の行事等への参加は、以前から津田地域に住んでおられる方が中心であり、その輪が広がりにくくなっている現状にある。地縁的なつながりは比較的薄くなってきていると考えられる。

平成30年10月、PTAによる、全保護者を対象とした「人権・同和教育についてのアンケート」が実施された（回収率75%）。アンケート結果より、次のことが分かった。

- ・「人権問題に関心がある」・・・95.4%
 - ・「自分自身の人権は保障されていると思う」・・・93.6%
 - ・「関心のある人権問題（多い順）」・・・いじめ、インターネットによる人権の侵害、障がい者差別、男女差別、LGBT（性的マイノリティ）、外国人差別、犯罪被害者差別、同和問題）
 - ・「子どもの人権について深刻と思うこと（多い順）」・・・いじめや仲間はずれ、大人が暴力や虐待を行うこと、メールやインターネットでの悪質な書き込みや嫌がらせ、有害な情報の氾濫、行政や地域全体で子どもを見守り、育てる環境になっていないなど
 - ・「子どもの人権を守るために必要と思うこと（多い順）」・・・子どもに自分を大切にすることを育む、家庭内の人間関係を安定させる、家庭・学校・地域の結びつきを強める、子どもの良い面や努力の過程を褒める、大人による体罰をなくす、子どもにとって有害な情報を規制するなど
- このような現状を踏まえ、研究に取り組むにあたっての課題を次のように考えた。
- 人権感覚を高め、自他を大切にし、ともに学び合う授業づくりを行う。
 - 安心して学校生活を送れる仲間づくりに努める。
 - 自尊感情を育み、自分に自信がもてるよう、人権意識を高める環境づくりに努める。
 - 学校・家庭・地域の連携づくりに努める。

6 研究の内容

(1) 人権感覚を高め、自他を大切にし、ともに学び合う授業づくり

- ①一人一人が考えをもち、進んで課題に取り組むことができるように課題設定の工夫をする。
- ②子ども同士がつながる学びになるように、話し合いの仕方等を工夫する。
- ③基礎・基本の力を育成するために、「聴く」と「声」を鍛える。
- ④人権の大切さや同和問題について正しく理解し、それを深めていくことができる授業を工夫する。
- ⑤人権・同和教育全体計画や年間指導計画に基づいて、計画的・系統的な人権教育学習を実践する。

⑥第四中学校区小中一貫教育における人権教育年間計画に基づいて地域や学校間の連携を図り、発達段階に応じた系統的な指導に努める。

(2) 自他を大切にして、お互いのよさを認め合う温かい仲間づくり

- ①互いに認め合い、安心して自分の思いや考えを伝え合うことのできる学級づくりに取り組む。
- ②自分の個性を十分発揮し、生き生きと活動できる仲間づくりに取り組む。

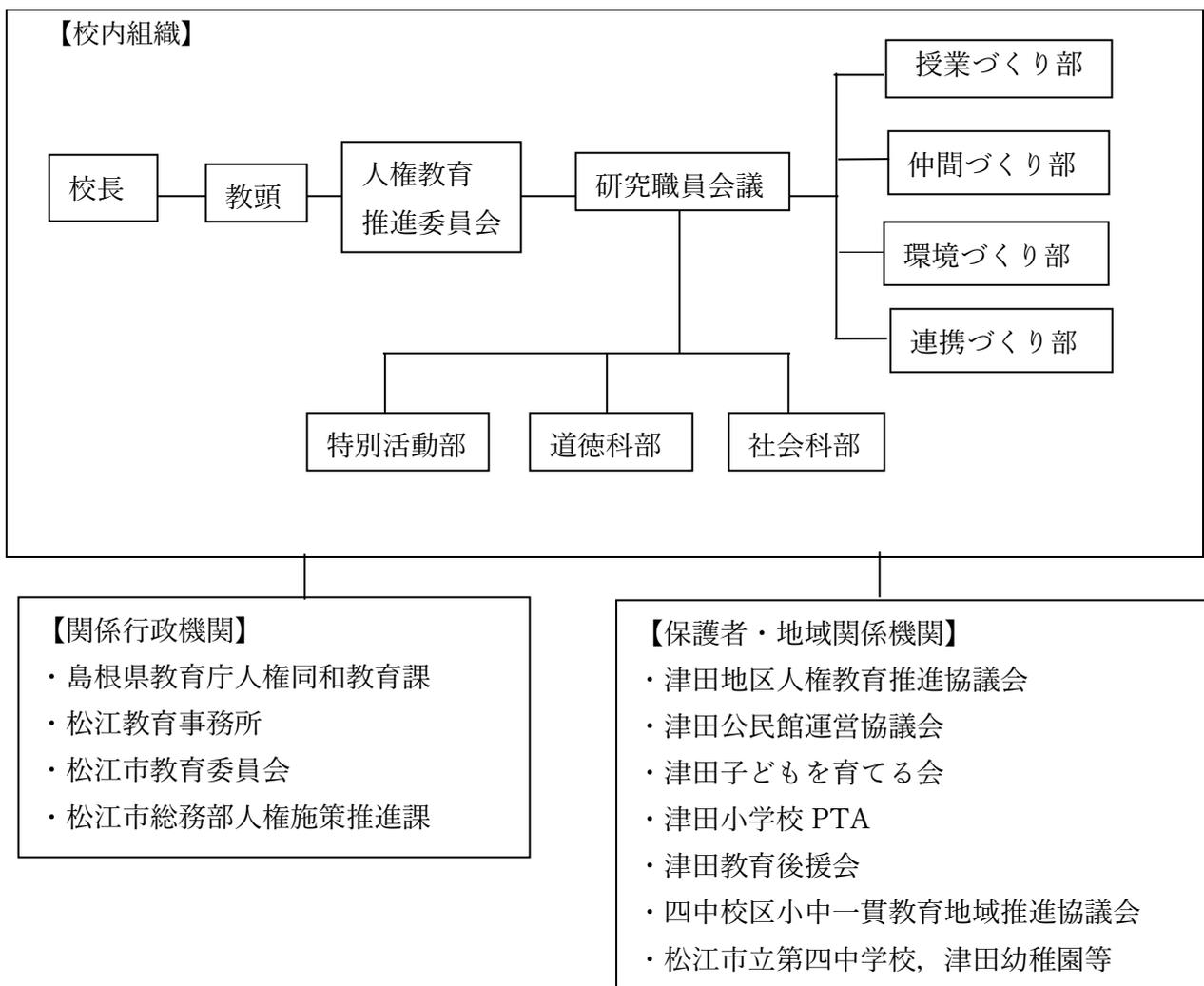
(3) 心を育て、人権意識を高める環境づくり

- ①人権意識を高める校内掲示を工夫する。
- ②人権教育や人権課題に関する教職員等の研修の充実を図る。
- ③児童の実態や変容をとらえるため児童の意識調査を行う。

(4) 地域との触れ合い、人との関わりを大切にした学校・家庭・地域の連携づくり

- ①学校・家庭・地域が連携した活動を推進する。
- ②活動後にアンケートを実施する。
- ③保護者、地域の方への学校評価を行う。

7 研究組織



8 各部の取組

(1) 人権教育推進委員会（校長・教頭・主幹教諭・人権教育主任・研究部）

- ・研究主題および重点目標の設定
- ・人権・同和教育全体計画の作成
- ・人権教育重点題材配当表の作成
- ・人権学習構想図の作成
- ・人権週間の実施

(2) 授業づくり部（研究部）・・・基礎づくり部、教科部（特別活動・道徳科・社会科）

① 研究内容：人権感覚を高め、自他を大切にし、ともに学び合う授業づくり

- ア 一人一人が考えをもち、進んで課題に取り組むことができるように課題設定の工夫をする。
- イ 子ども同士がつながる学びになるように、話合いの仕方等を工夫する。
- ウ 基礎・基本の力を育成するために、「聴く」と「声」を鍛える。
- エ 人権の大切さや同和教育について正しく理解し、それを深めていくことができる授業を工夫する。
- オ 人権・同和教育全体計画や年間指導計画に基づいて、計画的・系統的な人権教育学習を実践する。
- カ 第四中学校区小中一貫教育における人権教育年間計画に基づいて地域や学校間の連携を図り、発達段階に応じた系統的な指導に努める。

② 取組

ア 基礎づくり部

(ア)基礎学力の充実

- ・話し方・聴き方の指導、月の歌の設定
- ・チャレンジタイムの実施
- ・スピーチ活動の充実、家庭学習の習慣化

(イ)学校図書館活用教育・・・読書指導、情報活用能力の育成

イ 教科部（特別活動・道徳科・社会科）

(ア)授業研究・・・

教材研究、指導案作成、授業実践（ペア学習、全体学習、伝え方の工夫）

(イ)研究会報告

(ウ)人権・同和教育学習年間指導計画の作成と実践

(3) 仲間づくり部（生徒指導部）

① 研究内容：自他を大切にして、お互いのよさを認め合う温かい仲間づくり

- ア 互いに認め合い、安心して自分の思いや考えを伝え合うことのできる学級づくりに取り組む。
- イ 自分の個性を十分発揮し、生き生きと活動できる仲間づくりに取り組む。

② 取組

ア 学級づくり活動・・・朝終礼の工夫、係活動の充実

イ 委員会活動の充実・・・あいさつ運動、昼の放送の充実、花いっぱい運動等

ウ 縦割り班活動の充実・・・縦割り清掃活動、運動会

エ ペア学年活動の充実・・・なかよし読書

オ 集会活動の充実・・・よろしくね集会、うたごえ広場、なかよしウォークラリー、6年生を送る会など

カ 人権週間の充実

キ 中学生との交流活動の実施

(4) 環境づくり部（総務部）

- ① 研究内容：心育て、人権意識を高める環境づくり
 - ア 人権意識を高める校内掲示を工夫する。
 - イ 人権教育や人権課題に関する教職員等の研修の充実を図る。
 - ウ 児童の実態や変容をとらえるため児童の意識調査を行う。
- ② 取組
 - ア 人権教育に関する児童の意識調査の実施と集計結果に基づく話合い
 - イ 人権教育に関する校内研修による教職員集団づくり
 - ウ 校内環境の見直し、整備
 - エ 子どもの心を豊かにする校内掲示、学級掲示

(5) 連携づくり部（教務部）

- ① 研究内容：地域との触れ合い、人との関わりを大切にした学校・家庭・地域の連携づくり
 - ア 学校・家庭・地域が連携した活動を推進する。
 - イ 活動後にアンケートを実施する。
 - ウ 保護者、地域の方への学校評価を行う。
- ②取組
 - ア 地域での体験活動の推進
 - イ 地域の方との関わりを大切にした活動の充実
 - 外部講師によるクラブ活動、書き初め教室、図書館ボランティア等
 - ウ 人権教育の取組や人権に関する情報の発信
 - 人権教育授業公開日、学校便り、人権便り
 - エ P T Aや公民館と連携した活動や研修会の充実
 - 人権講演会、保護者の人権意識調査
 - オ 中学校と連携した体制づくり
 - カ 島根県教育庁人権同和教育課、松江教育事務所、松江市教育委員会、松江市総務部人権施策推進課との連携

9 検証・評価

- (1) 人権感覚を高め、自他を大切にし、ともに学び合う授業づくり
 - ① 研究授業と研究協議で検証する。
 - ② 児童の発言や振り返りなどから検証する。
 - ③ 人権課題や同和問題に視点をあてた研究授業と研究協議で検証する。
 - ④ 児童の発言や振り返り等から人権や同和問題についての見方・考え方等の変容を検証する。
 - ⑤ 全国学力・学習状況調査と県学力調査結果の児童意識調査等の分析から検証する。
- (2) 自他を大切にして、お互いのよさを認め合う温かい仲間づくり
 - ① 日常において児童の様子を観察し、実態を把握する。
 - ② アンケートQ-Uを実施し、分析する。
 - ③ アンケートや教育相談を実施し、児童の理解を図る。
 - ④ 活動の振り返りにより、関わり方や思いを把握する。
- (3) 心を育て、人権感覚を高める環境づくり
 - ① 児童や保護者、地域の方の学校評価によって検証する。
 - ② 教職員の自己評価によって検証する。
- (4) 地域との触れ合い、人との関わりを大切にした学校・家庭・地域の連携づくり
 - ① 年度始めや年度末に意識調査を行い、その変容によって検証する。
 - ② 活動後にアンケートをとって検証する。
 - ③ 保護者、地域の方への学校評価によって検証する。

研究主題

自他を大切にして、支え合い、ともに学び合う子どもの育成

めざす子どもの姿

- 自分を肯定的に受け止め、自分のよさを伸ばそうとする子ども
- 他の人のよさがわかるとともに、その思いを受け止め、相手の立場に立って考え、行動することができる子ども
- 互いに思いや考えを出し合い、友達と関わり合って学ぶ子ども
- 身近にある問題に気づき、自分のこととして考え、主体的に行動できる子ども

重点目標

- A 自尊感情を高める
- B 共感的理解を深める
他者尊重の態度を育む
- C 伝え合う力を伸ばす
- D 主体的な行動力を育む

(1) 人権感覚を高め、自他を大切にし、ともに学び合う授業づくり

- ①基礎学力
- ②学校図書館活用教育
- ③授業研究
- ④研究会報告
- ⑤人権・同和問題学習年間指導計画の作成と実践

(2) 自他を大切にして、お互いのよさを認め合う温かい仲間づくり

- ①学級づくり活動
- ②委員会活動の充実
- ③縦割り班活動の充実
- ④ペア学年活動の充実
- ⑤集会活動の充実
- ⑥人権週間の充実
- ⑦中学生との交流活動の実施

(3) 心を育て、人権意識を高める環境づくり

- ①人権教育に関する児童の意識調査の実施と集計結果に基づく話し合い
- ②人権教育に関する校内研修による教職員集団づくり
- ③校内環境の見直し、整備
- ④子どもの心を豊かにする校内掲示、学級掲示

(4) 地域との触れ合い、人との関わりを大切にした学校・家庭・地域の連携づくり

- ①地域での体験活動の推進
- ②地域の方との関わりを大切にした活動の充実
- ③人権教育の取組や人権に関する情報の発信
- ④PTAや公民館と連携した活動や研修会の充実
- ⑤中学校と連携した体制づくり
- ⑥島根県教育庁人権同和教育課、松江教育事務所、松江市教育委員会、松江市総務部人権施策推進課との連携

人権感覚を磨き、自尊感情を育てる

1.1 各部の取組内容

(1) 授業づくり部の取組

授業づくり部では、「人権感覚を高め、自他を大切にし、ともに学び合う授業づくり」をめざし、基礎づくり部と教科部を組織し、以下の取組を行った。

① 基礎づくり部

ア 基礎・基本の力の育成

(ア)「聴く」を鍛える

(イ)「声」を鍛える

② 教科部

ア 特別活動部の取組

研究主題を受けて、特別活動の時間では、以下の4点について重点的に取り組むこととした。

(ア)重点項目

学級活動(1)

・議題設定の工夫

・事前準備の工夫

・話合いの工夫

◇出し合う段階での工夫

◇くらべ合う段階での工夫

◇まとめる(決める)段階での工夫

・事後の活動の工夫

(イ)研究内容(1)「人権感覚を高め、自他を大切にし、ともに学び合う授業づくり」

・議題設定の工夫

◇議題を決める際には、議題ボックスを設置しておく等して、児童に必要感がある議題を設定する。

・事前準備の工夫

◇事前に議題を知らせ、一人一人が学級会カードに意見を書いておくことで、自分の考えをもって会に臨めるようにする。

・話合いの工夫

・出し合う段階での工夫

◇聴き方、話し方のモデルを示すなどして、友達の考えを認め合える態度を育てるようにする。

◇出された意見に名札をつけたり、理由を板書に示したりすることで、友達の意見を大切にしながら話合いを進められるようにする。

・くらべ合う段階での工夫

◇ペア、グループなど少人数で話し合う場を、必要に応じて設定する。友達と話すことで自分の考えを深めたり、全体の場で自信をもって発言できるようにしたりする。

・まとめる(決める)段階での工夫

◇多数決に頼りすぎずに折り合いをつけていけるような方法(「学級会忍法」など)を取り入れる。

- ・事後の活動の工夫

◇自分のよさを発揮したり、互いのよさやがんばりに気付いたりすることができようにする。

イ 道徳科部の取組

研究主題を受けて、道徳科では、以下の4点について重点的に取り組むことにした。

(ア) 重点項目

- ・教材提示の工夫
- ・自分の考えをもつための工夫
- ・自分の思いや考えを語らせる工夫
- ・終末の工夫

(イ) 研究内容：「人権感覚を高め、自他を大切にし、ともに学び合う授業づくり」

- ・教材提示の工夫

◇紙芝居やペープサート、映像などで教材を提示し、児童の興味・関心を高め、内容理解を助けるよう工夫する。

◇教材を提示する前に登場人物やその関係性、資料の概要を説明してから読むことで内容を捉えやすくする。

◇資料を前半と後半に分け、終末が分からない状態で登場人物の行動や気持ちを考えさせ、児童の多様な考えを引き出す。

- ・自分の考えをもつための工夫

◇自分の考えを深めたり、整理したりするために書く活動を取り入れる。

◇動作化や役割演技を取り入れる。

- ・自分の思いや考えを語らせる工夫

◇座席の配置を工夫したり、ペアでの対話やグループでの話し合いを取り入れたりする。

◇意図的指名をしたり、ネームプレートを活用したりする。

- ・終末の工夫

◇終末場面で書く活動を設定し、自分の成長を実感したり、これからの課題や目標を見つけていたりして自己の生き方について考えさせる活動を取り入れる。

ウ 社会科部の取組

研究主題を受けて、社会科では、以下の3点について重点的に取り組むことにした。

(ア) 重点項目

- ・児童一人一人が探究する課題設定の工夫
- ・気付きを促す資料の活用の工夫
- ・学級全体で伝え合う活動の工夫

(イ) 研究内容：「人権感覚を高め、自他を大切にし、ともに学び合う授業づくり」

- ・児童一人一人が探究する課題設定の工夫

◇歴史上や現代社会における差別事象において、何を追究していくのか課題との出合わせ方を工夫する。

◇ねらいに迫れるような学習の目標を設定する。

◇児童一人一人が問いをもち、学習の見通しがもてるように工夫する。

・気付きを促す資料の活用の工夫

◇「差別の事象」「差別に立ち向かった人々の生き様」など、事実にもとづいて自分のこととして考え、つかむことができる資料を精選する。

◇社会的背景・事象に関連性をもたせる資料を選ぶ。

◇資料を拡大したり、ワークシートにしたりして配付するなど、提示方法を工夫し、効果的に扱う。

・全体で伝え合う活動の工夫

◇一人一人の考えを確かなものにするための書く活動を取り入れる。

◇ペアでの対話により自分の考えを確実にしたり、再構築したりする。

◇学級全体の話合いで多くの考えと出合わせ、一人一人の考えを深化したり、広げたりしていくような話合いにしていく。

◇課題の解決に向かって互いの考えを伝え合い、高め合う活動にしていく。

(2) 仲間づくり部の取組

学校の教育課程では、集団登校に始まって、学級での授業、掃除、委員会活動、クラブ活動、学校行事等に至るまで、様々な活動がある。そのほとんどは同学年、または異学年集団を母体とした集団での活動が基盤となる。こうした集団での活動のすべてにおいて、望ましい人間関係を築き、人権意識の基盤を育てていくことができると考えた。

仲間づくり部では、次の4つの活動場面を意図的に取り上げ、仲間づくりの場とすることにした。

①縦割り班活動 ②児童会活動 ③異学年交流活動 ④学級づくり活動

また、次のような目指す児童像を設定し、上記の活動の中で場の設定の工夫や教師の支援を工夫しながら目指す児童像の実現を図ることにした。

- ・ 交流の場を通して、相手の気持ちや立場を考えようとする思いやりの心を育成する。
- ・ 交流を通して、お互いのよさを認め合おうとする心情を育成する。

① 縦割り班活動

ア 取組の概要

縦割り班活動は、異学年での集団活動を通して他者を思いやる心情を育てることをねらいとし、「なかよし班」の名称で全校を縦割りで32班に分け、遊びや集会活動に取り組んだ。具体的な活動については、以下の通りである。

(ア) なかよし遊び (イ) セタ集会 (ウ) 校内ウォークラリー

② 児童会活動

ア 取組の概要

児童会活動では、「自分たちの活動を充実させる」「他の委員会の活動を認め合う」という2つの視点から、仲間づくりに取り組んだ。

(ア) なかよし委員会 (よろしくね集会・セタ集会・校内ウォークラリー等)

(イ) メロディー委員会 (うたごえ広場・集会活動での歌等)

(ウ) 図書委員会 (読書週間・図書祭り等)

(エ) ぐらし委員会 (あいさつ集会・あいさつ週間等)

(オ) 放送委員会（行事前のテレビ放送・児童インタビュー等）

(カ) なかよし委員会&スポーツ委員会（なかよしスポーツ集会）

③ 異学年交流活動

ア 取組の概要

児童にとって、異学年の交流活動は、人との関わり方や生活の知恵などを吸収する貴重な場である。異学年とのふれ合いや関わり合いを通して、児童同士がよりよい人間関係を築くことができるようになることをねらいとしている。また、上学年は下学年への思いやりの心を、下学年は上学年への尊敬や感謝の心を育てることもねらいとしている。

このように異学年間での交流活動は、児童の仲間意識を育てるとともに楽しく学びの多い学校づくりに大きな役割を果たすものと考え、実践に取り組んだ。

(ア) なかよしランド (イ) スポーツテスト (ウ) なかよし読書 (ペア読書)

④ 学級づくり活動

ア 取組の概要

本校では、互いに認め合い、安心して自分の思いや考えを伝え合うことのできる学級づくりを目指している。そのために、アンケートQ-Uや教育相談等を通して児童の実態を把握したり、その情報を教職員間で共有したりしながら、児童一人一人を全教職員で支えられるように、組織的な取組を大切にしている。このような組織的な取組を基盤にしながら、今年度は、本校の人権教育の重点目標である次の4つの視点をもって学級づくりに取り組んだ。

(ア) 自尊感情の育成 (イ) 共感的理解・他者尊重の態度の育成

(ウ) 伝え合う力の育成 (エ) 主体的な行動力の育成

(3) 環境づくり部の取組

心を育て、人権意識を高める環境とはどのような環境かということを考え、基盤づくりとして、現在行っている教育活動を生かす形で取組を進めた。また、教職員の人権意識を高めることが何よりも大切であると捉え、研修の機会を増やしたり、研修の持ち方を工夫したりした。あわせて子ども達の人権意識調査を実施し、実態把握に努めると共に、それを基に話し合い、改善していく手だてを探り実践した。

ア 校内環境

(ア) 校内掲示 (イ) 教職員研修

(4) 連携づくり部の取組

児童の人権意識を高めるためには、学校だけではなく、家庭や地域との協力が不可欠である。連携づくり部では、児童の自尊感情や有用感を高めるために、自分たちの周りの様々な立場の人がいて、関わり合い支え合いながら生活していることを感じられる交流の場を設けた。

ア 保護者や地域と学校との連携

(ア) 七夕集会 (イ) クラブ活動 (ウ) 書初め (エ) 学校図書館(図書館ボランティア)

(オ) 家庭科ボランティア (カ) 昔遊び (キ) 人権に関わる講演会の開催

1.2 成果と課題

(1) 授業づくり部

研究内容(1)

人権感覚を高め、自他を大切にし、ともに学び合う授業づくり

①基礎づくり部

ア 基礎・基本の力の育成

基礎・基本の力を育成するために、「聴く」と「声」を鍛えることに計画的、日常的に取り組んだ。「声のものさし」「話し方名人」「津田っ子の聴き方」の3種類の掲示物を作成し、各学級に掲示することで日々の学習において意識づけをすることができた。それにより、発言するとき、聴くときの相手意識が高まりつつあり、相手を大切にする気持ちも育ってきている。

イ チャレンジタイムの取組

毎日、決められた時間に集中して学習する時間を設けることで、基礎・基本の力の定着とともに、落ち着いた姿勢で次の学習に向かうことができるようになってきている。

また、学力調査の結果の分析を生かし、本校の課題である内容にも取り組むようにした。ただ、一斉に同じ課題に取り組むので、個人差に合わせる 것이難しい。今後は、習熟度の差に応じた問題を準備したり、家庭学習と連動させたりするなどの工夫をして、さらに基礎・基本の力の定着を図る時間としていきたい。また、自分の伸びを確認し、意欲が継続するように振り返りの場を設けたり、評価方法を工夫したりしていきたいと考える。

ウ 学力向上の取組

6年生の全国学力調査結果をもとに、全職員で対応策や授業改善等について検討する機会をもったことは、効果的であったと考える。今後も、地道に実践を積み重ねていくことが、学力向上に有効であると考えている。

エ 家庭学習

家庭での学習習慣の定着に向け、今年度も小中一貫教育学力向上部で作成した学習の手引きを配布して家庭の協力を得ながら取り組んだ。3年生以上が取り組んでいる自主学習ノートでは、教師の評価言やスタンプ・賞状などでの賞賛、学級だよりでの紹介等の効果もあり、児童の生活の中に定着してきている。また、同じ中学校区の古志原小学校との自主学習ノート交流や校内での秀作展示などを通してよい取組に触れることで、自主学習の内容・ノートの質のレベルアップや学習意欲の向上につながった。

一方で、家庭での学習時間が短く、メディア接触時間が長い傾向は依然として続いている。学級での全体指導や個別指導を継続し、家庭学習の時間が増えるように支援していく必要がある。今後も、意欲が継続するように手立てを工夫し、学習習慣の定着や学力向上をめざして取り組んでいきたい。

オ 学校図書館活用教育

どの学年でも、図書館を活用した学習が積極的に行われた。国語科、生活科、社会科、総合的な学習の時間、理科などの教科・領域で図書館資料の活用があった。

本校では、1年生の時から図書館での調べ学習を行っている。学年が進み、調べ学習の経験を積み重ねることで、自分の学習課題に関する本や図鑑、パンフレット、事典、新聞など

の資料を探したりその資料をもとに課題解決したりする学習の仕方が身に付いてきた。自分のテーマに沿って調べる力が育ってきているといえる。

読書指導については、「読書ビンゴ」を活用し、児童が様々な分野の本に触れるきっかけとした。読書の量だけでなく、読書の質を高める手立てを考えていくことが大切である。「家読」の推奨を学校目標に掲げ積極的に取り組んだことは、児童にとってだけでなく、保護者にとっても有意義な取組となった。

今年度は子どもたちの心を育て、人権意識をさらに高めるための環境づくりとして、「人権の本コーナー」を設けたり、「読書ビンゴ」の選書の中にそれらの本を取り入れたりした。また、相手のことを考えながら選書したり、高学年児童が図書館に通うようになるきっかけにしたりするために、上学年と下学年のペア学年によるペア読書を実施した。

これらの取組は、児童の他者尊重の態度や主体的な行動力の育成につながるよい活動となった。今後も引き続き行っていきたい。

② 教科部

ア 特別活動部の取組

(ア)成果

・議題設定の工夫

◇児童が学級活動の手引書で学んだことを生かしながら、議題を選定していくように支援した。また、議題提案カードに寄せられた提案の中から議題を選定した。児童の気持ちに寄り添う議題となったことで、児童が自分の考えをしっかりと持ち、意欲的に話し合い活動を行う姿が見られた。

◇常設している学級会コーナーに、議題、提案理由、話し合いの日時や事後活動の計画を掲示することにより、児童は見通しをもって自発的に活動することができた。・思いやりの気持ちを、より具現化して会を計画していくために、「話し合うこと」の内容を工夫した。児童の気持ちをどのように実現させていったらよいか明確な形となって意見として出され、実際の会の運営に大いに役立てることができた。

・事前準備の工夫

◇自分の考えをもって話し合いに臨むための事前準備として、児童は学級会カードを書いた。事前に教師が学級会カードに書いてあることを把握し、それぞれの考えを認めるコメントを書いておくことで、児童は自分の考えに自信をもって話し合いに臨むことができた。

・話し合いの工夫

◇出し合う段階での工夫

事前に司会グループのメンバーで準備していた手書きの短冊を活用し、誰の意見なのか明確に分かるように名札をつけて掲示した。また、その考えにした理由についても、教師が短く板書することで、くれば合う段階やまとめる段階で、友達の意見を大切にして照らし合わせて考えることができるようにした。名札があることによって友達の名前を挙げて発言することができ、名前を出された児童にとっては有用感を高めることにつながった。

◇比べ合う段階での工夫

すぐに多数決をとるのではなく、「にんぼう おりあいのじゅつ」の掲示を取り上げ、児童の意見から折り合いをつけて話し合いができるようにした。相手の意見を受け止め、まとめていくことを意識して話し合いを進めることができた。

◇まとめる（決める）段階での工夫

少人数での話し合いの時間を設定し、近くの友達と意見を交流することで、全体の場でも発言しやすい雰囲気をつくることができた。決定に至らなかった意見については、他の会で実践できることや、これからの様々な場面で生かしていくことができることを伝えた。そして、一人一人が大切にされる学級であることを感じられるよう、出されたすべての意見が大切であることを確認した。

◇事後の活動の工夫

学級会で決まった集会活動に必要な係を全員で分担し、協力して準備したり実践したりする中で、児童は自分のよさを発揮したり、友達のよさががんばりに気付いたりすることができた。

また、一連の活動を振り返って感想を発表したり、学級会コーナーに実践したことを掲示したりしたことも、互いのよさに気付くことにつながった。

(イ)課題

◇今後の課題は、児童が様々な議題での話し合いの経験を積み重ねていくことである。また、児童も教師も一緒になって、よりよい話し合いの仕方や手順を学び、円滑に集団決定ができるように教師自身も適切な指導や助言の仕方について学んでいく必要がある。

イ 道徳科部の取組

(ア)成果

・導入の工夫

◇事前アンケートは児童の実態把握や本時の価値への方向づけにつながった。

◇導入で主題について考えさせたことは、本時の価値への方向づけや終末で主題について考えさせるための伏線となった。また、自我関与しながら自分のこととして考えることにもつながった。

・教材提示の工夫

◇資料を提示する前に登場人物やその関係性について押さえたことは、場面把握が難しい児童への支援になったほか、中心人物の気持ちをより深く考えるための手がかりになった。また、資料を前半・後半に分けて提示し、結末が分からない状態で中心人物の行動や気持ちを考えさせたことは、児童の多様な考えを引き出すために有効だった。

・自分の考えをもつための工夫

◇児童一人一人が本時の価値について自分の考えをもつことができるように、重点をおく場面でワークシートを活用した。話し合いが進む中で友だちの考えと比べたり自分の考えを振り返ったりしながら価値に対する思考を深めていくためにも有効であった。

◇ブレインストーミング的に中心発問について児童が思いついたことを自由に書かせたことは、児童の多様な考えを引き出すのに有効であった。また、文章表現が苦手な児童もキーワードを吹き出しの中を書くなど、自分の思考を表出できていたので効果的であったと考えられる。

- ◇中心発問ではネームプレートを活用した。自分の考えをもちにくい、あるいはワークシートに考えを書きにくい児童も、自分の考えに近い意見にネームプレートを貼ることで、学習に参加し立場を明らかにすることができた。
- ・話し合いの工夫
 - ◇中心発問では、座席を離れて黒板の前に集まって話し合う場も設けた。ネームプレートで自分や友達の考えが明確になっていたことと、友達と近い距離にいるという安心感で、より活発な話し合いになった。友達の意見を聞いて考えが変わった児童がいたり、本音に近い意見も出てきたりして話が盛り上がり、多様な考えを引き出すことができた。
 - ◇道徳の学習では、普段からお互いの顔が見えやすいように座席をコの字型にし、声を聴くだけでなく、話している友達の表情や態度を周りの児童がしっかりと見ることで、誰のどの考えも大切にし、安心して話せる雰囲気につながっている。
- ・板書の工夫
 - ◇場面絵を貼り、登場人物の立場をおさえた。板書をもとに、どこに問題があるかを自分の身に置き換えて考えるように促した。児童の考えたことをじっくりと聴き、掲示資料や色チョークを使って板書をした。
 - ◇児童が登場人物の気持ちを考えやすいように吹き出しを用いた。また、主題について多面的・多角的に考えられるように、登場人物の考えを整理し、比較できるようにした。このような整理をしたことで、主題についていろいろな視点から考えることができた。
 - ◇中心発問での児童の意見はワークシートと同様の構造で板書し、思考の広がりを見えるようにすることができた。

(イ)課題

- ◇授業の中で児童の様々な思いや考えを引き出すことができた一方で、それを聴くだけに終始した児童もいた。児童一人一人が思いや考えを語り、児童同士がつながる学びになるように、ペアやグループ学習など話し合いの仕方を工夫し、取組を積み重ねていく必要がある。

ウ社会科部の取組

(ア)成果

- ・課題設定の工夫
 - ◇ワークシートに書き込む活動は、児童にとって取り組みやすく、人々が団結し、自らの力で問題を解決していこうとしたことを考えるのに有効であった。
 - ◇資料活用の工夫
 - 読み物資料や写真、図、グラフなど、当時の差別事象や差別を受けながらも力強く生きた様子などについて、教科書の資料を中心にできるだけ児童が身近に感じる資料で学習した。児童が、問題意識をもって課題に取り組んだり、差別を受けた人々の思いなどをつかんだりすることにつながった。
 - ◇伝え合う活動の工夫
 - 全体場で発表できにくい児童も自分の考えたことを積極的に伝えたり、友達の考えに反応しながら聴いたりすることができるよう、ペアでの伝え合いを設定した。学習を深めることにつながるペアもみられた。

(イ)課題

- ・ワークシートを効果的に活用するためには、穴埋めで確認するだけでなく、児童に問い返すことで、確認したり意識化させたりすることが必要である。
- ・児童が見通しをもって取り組むことができるよう、板書をワークシートと連動させたり、めあてからふりかえり、まとめまでが見える形になるよう構造化したりすることが必要である。
- ・児童自身の言葉で歴史事象の解釈を語らせることで、児童なりの理解を促していくことが大切であった。児童の発言、つぶやきを全体の学習に生かすことが課題である。
- ・児童が主体的に学習する授業を目指すために、「課題設定・提示の工夫」「資料の活用の工夫」「伝え合う活動の工夫」が1時間の授業の中でどうつながるのかをしっかりと構成し、指導者がコーディネートすることが必要である。
- ・一つ一つの学習を単発に終わらせるのではなく、既習内容の掲示物を残したり、授業の中で関連づけを図ったりするなど、年間を見通した計画的な指導に努めることが課題である。
- ・児童の考えを深め、課題に迫るためには、本時のめあてに対して必然性のあるペア学習にすることが必要である。
- ・ペア学習の様子を指導者が把握し、広げたり生かしたりしていくことが必要である。

(2) 仲間づくり部

研究内容(2)

自他を大切にして、お互いのよさを認め合う温かい仲間づくり

仲間づくりの場として、4つの活動場面(縦割り班活動、児童会活動、異学年交流活動、学級づくり活動)を意図的に取り上げ、それぞれの場の特性を生かした活動や支援を行ってきた。

① 成果

ア 児童にとって必然性を感じられる場づくりを大切にする。

異学年交流の場面で、2年生が1年生に学校の教室を紹介したり、使い方を教えたりする活動やスポーツテストのやり方を6年生が1年生に教える場面、また、今回紹介はできなかったが、6年生が5年生に修学旅行で学んだことを伝える活動などは、児童がそれぞれの学年で、関わる必要感や必然性を持たせることができやすい活動である。

学級づくりでも、学期初めの場面や席替えをした後の隣の席や同じグループの児童と仲間づくりのゲームを実施するのも新しい出会いの場であり、児童にとっての活動の必然性をもたせることができる。

こうした必然性や必要感が高まることで児童は活動への意欲を高めることにつながり、関わる相手への思いやりの気持ちをもつことにつながった。

イ 児童の主体的な活動の場を保証する。

縦割り班活動では、6年生の児童がリーダーとして異学年の児童が楽しめる活動やルールを考えた。また、「あいさつができる津田小学校」を目指し、くらし委員会の5、6年生が、あいさつチェックシートを考え、取り組んだ。人間関係づくりの基盤となるあいさつを全校の児童に意識してもらうために、自分たちで考え出したチェックシートを活用することで、あいさつへの意欲的で主体的な取組が見られた。

高学年児童が活動のねらいを把握し、自分たちで工夫して取り組む場を用意することで意欲的な取組につながり、思いやりの心を育てることにつながった。

② 課題

ア 次年度の仲間づくりの取組の見通しをもつこと。

本年度の実践をふまえて、4つの部会でどのような活動に取り組むか年間の見通しをもっておくことが必要である。そうすることで、年間を見通した仲間づくりを進め、めざす人権教育のねらいを達成することができると考えた。

(3) 環境づくり部

研究内容(3)

心を育て、人権意識を高める環境づくり

心を育て、人権意識を高める環境とはどのような環境かということを考え、掲示、環境美化、教職員研修、児童の人権意識調査に取り組んだ。

① 成果

ア 掲示については、人権意識を高める意図をもって掲示することの有効性に改めて気付くことができた。

イ 環境美化については、委員会活動や自然に親しみ、野菜や花などを大切に育てるような児童自身に関わる活動によるものを大切にすることで、優しい気持ちを持ったり、情緒の安定を図ったりすることができた。

ウ 教職員研修については、回数は少なかったが、ミニ研修を重ね、常に人権意識を高めようとする大切さが確認できた。

エ 児童の人権意識調査については、実態、課題を把握することができた。

② 課題

ア 今年度取り組んだことを次年度に生かすためには、年間を見通して「常に」環境を整えていくことが大切になる。特別ではなく日常でなくてはならないと思う。また、環境づくり部がするのではなく、環境づくり部が中心となって、児童、教職員すべてが参加するような形で環境を整えていくことを考えていきたい。

(4) 連携づくり部

研究内容(4)

地域とのふれあい、人との関わりを大切にした学校・家庭・地域の連携づくり

① 成果

ア 活動を通して、児童は自分とは違う立場の人がいることを知り、自分の家族以外の高齢者や地域の方との関わりをもつことができた。それぞれの学年での活動を通して、やりがいを感じることができた。また、手紙のやりとりで、自分たちの活動が相手に喜んでもらえたことや、次回を楽しみにしてもらっていることが分かり、やりがいを感じるとともに、相手の気持ちを考えて行動することの大切さを学ぶことができた。

イ 保護者や地域と連携することにより、学校でどんな活動や学習をしているかを理解してもらったり、それに積極的に関わろうとする保護者や地域の方々の意欲を感じたりすることができた。

② 課題

ア 関わる相手によって反応がすぐに返ることもあればそうでないこともあり、児童の興味関心や意欲の高まりに差が見られることもあった。児童自身が主体となって活動しようという態度をいかに育てるかが課題である。系統的に交流活動をすることで生まれた児童の変化については、今後も継続していくことで検証できると考える。

本研究は、自他を大切にし、他の人の思いや願いを受け止め、相手の立場に立って考え行動するとともに、互いに関わり合って学ぶことができる児童を育てるための研究である。これまでの研究結果から、人権・同和教育重点目標に掲げためざす子どもの姿が、学校での学習や集団生活、地域での生活の中で一層育まれてきていると受け止めている。

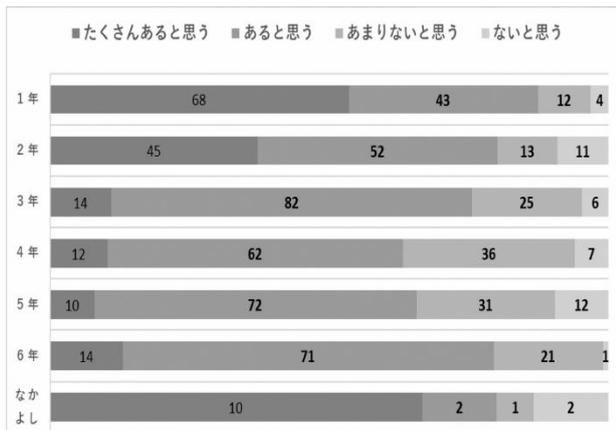
研究を推進していくにあたっては、校務分掌と連動させて校内組織をつくった。本研究を通して得られた様々な成果を本校学校運営の基盤として位置づけ、それぞれの校務分掌における取組の中で継続して実施し、児童とともによりよい生き方を目指して、今後もさまざまな学習活動を創造していきたいと考える。

〈児童の意識調査の分析〉

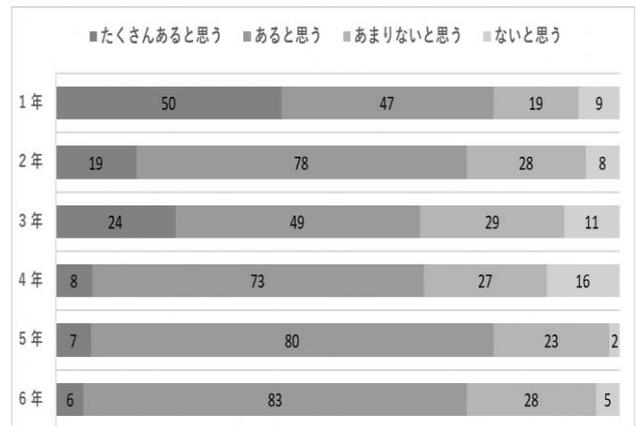
分析・低学年

○良いところ

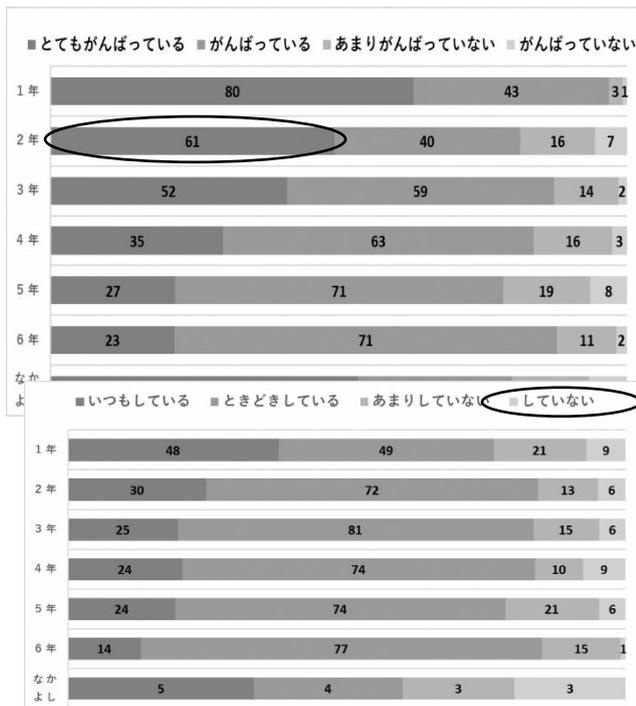
【R1①】



【H30①】



【R1②】

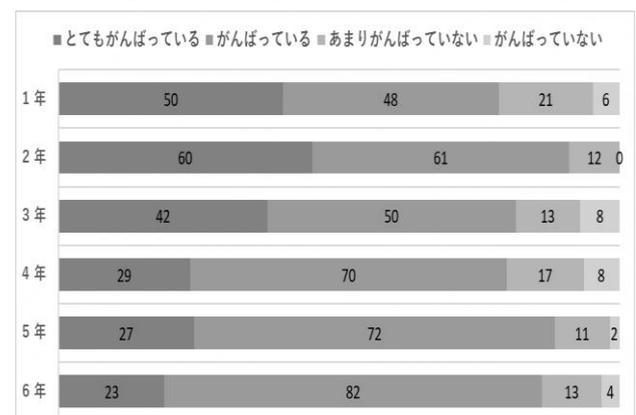


【H30②】

①②で「たくさんある・ある」と答えた児童が他の学年と比べて多いことから、自己肯定感が高く、それを伸ばそうとしている児童が多いことが伺える。特に2年生においては、昨年度と比べ、②で「とてもがんばっている」と答えた児童が多くなっている。

◇今後の課題

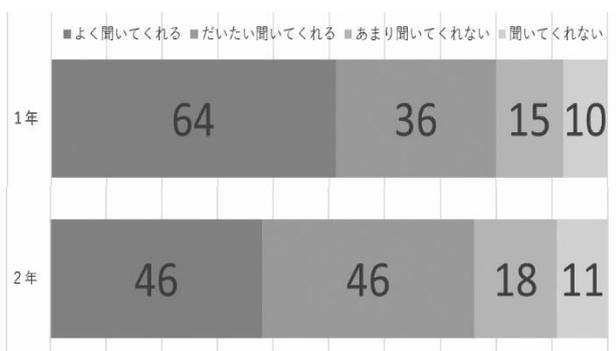
【R1⑥】 1年生については、⑥で「あまりしていない・していない」と答えた児童が他の学年に比べて多いことから、自分自身のことだけではなく、少しずつ友達のことへも目を向けることができるよ



うに声かけをしていく必要がある。

【⑪の2カ年比較 上：H30 下：R1】

2年生については、昨年度に比べて、⑪で「あまり

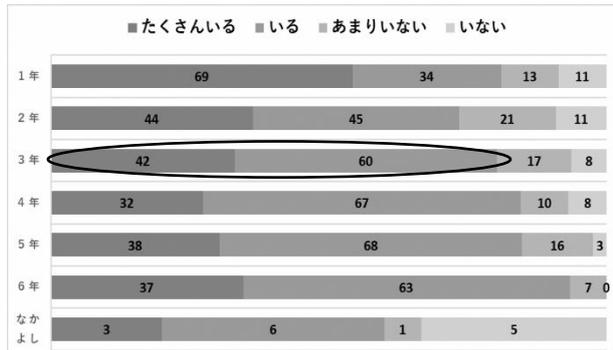


いない・いない」という回答が増えていることから、自身の気持ちを打ち明けることができる友好的な友達関係を築くことができていると考えられるため、教師がつなぎ役となって子ども同士をつなげていくことが必要であると考えられる。

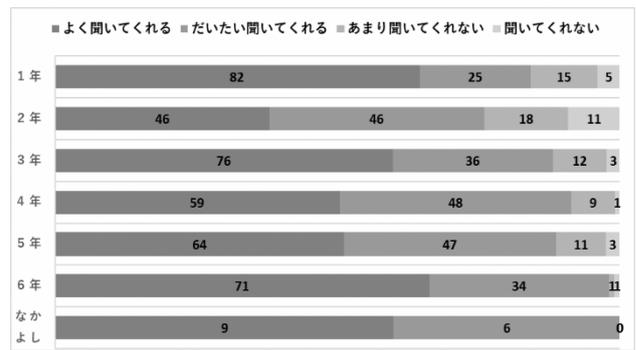
分析・中学年

○良いところ

【R1④】



【R1⑪】

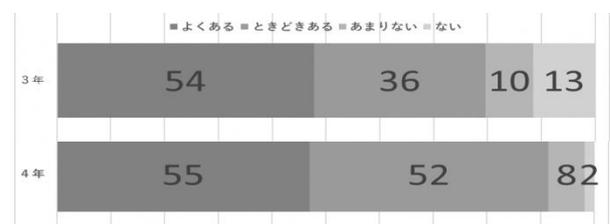


【③の2カ年比較 上：H30 下：R1】

3年生



4年生



3年生については④、4年生については⑪で「いる・たくさんいる」と答えた児童が多いことから、友達と友好的な関係を築くことができている、友達を意識することが多くなったと考えられる。その背景には、③で肯定的な回答が増えていることから、声をかけてもらったり、親切にしてもらったりして、うれしかった経験が多くあったと考えられる。

◇今後の課題

【⑧の2カ年比較 上：H30 下：R1】

3年生



4年生



⑨では、比較的肯定的な意見が多い一方で、⑧で「できていない・あまりできていない」と答えた児童が3年生、4年生ともに昨年と比べて増えている。学習内容が難しくなったことも要因のひとつと考えられるが、教師の問題づくりや支援にも工夫が必要であると考えられる。

分析・高学年

○良いところ

【⑨の2か年比較 上：H30 下：R1】

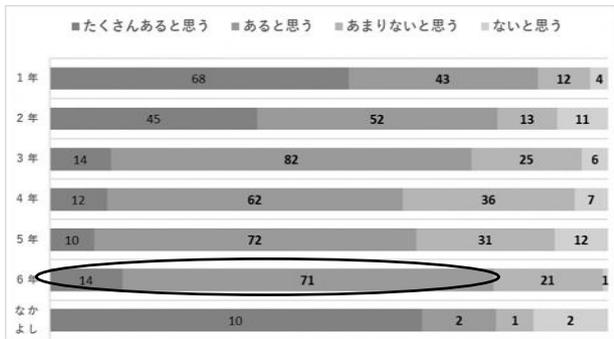


【⑩の2か年比較 上：H30 下：R1】



5年生については⑨、⑩が良い結果になっている。友だちの話を最後まで聞いたり、自分の話をよく聞いてもらったりしていることが分かる。前年度と同じく、友だちとの関わりは良好であるといえる。

【R1①】



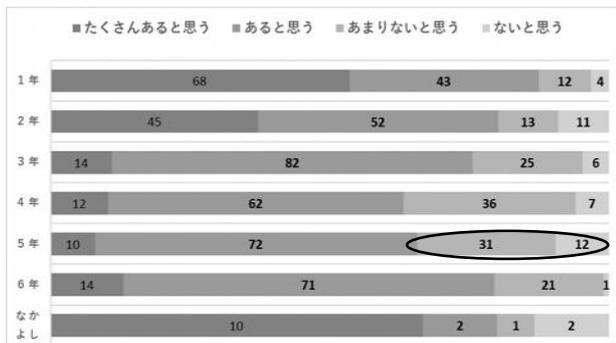
【⑪の2か年比較 上：H30 下：R1】



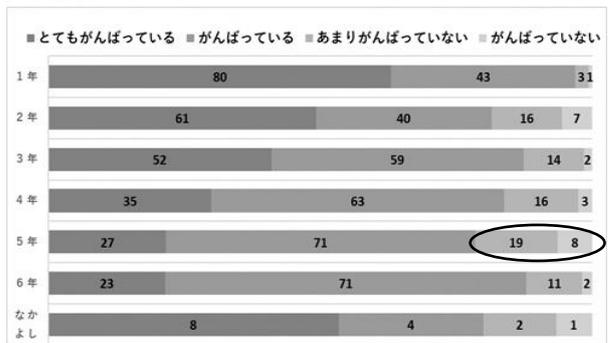
6年生については⑪、⑫が良い結果になっている。友だちに声をかけてもらったり、話をよく聞いてもらったりしていると実感している児童が多い。友だちとの関わりが良好で思いやりのある児童が増えた結果であると思われる。

◇今後の課題

【R1①】

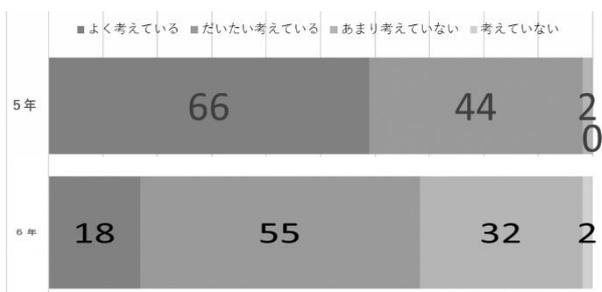


【R1②】



5年生については、①、②で「ないと思う」と答えた児童が多く、自己肯定感が低いことがうかがえる。これは、学年別にみても多い傾向にある。良いところを伸ばそうという意識も低く、前年度から引き続きの課題である。

【⑧の2か年比較 上：H30 下：R1】

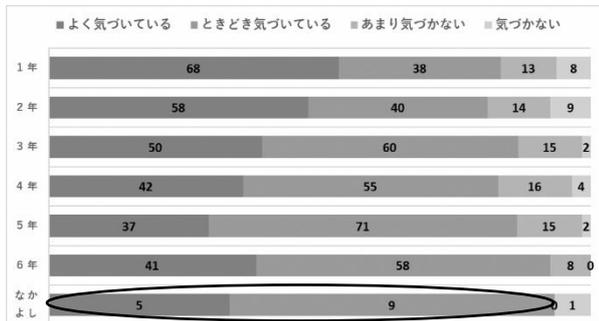


6年生については、⑧は学習問題や話し合いなどで自分の考えを深めたり、広げたりすることがよくできている児童が、かなり減ってきている。自分の意見や考えを持ち、相手に伝えるような授業を工夫していきたい。

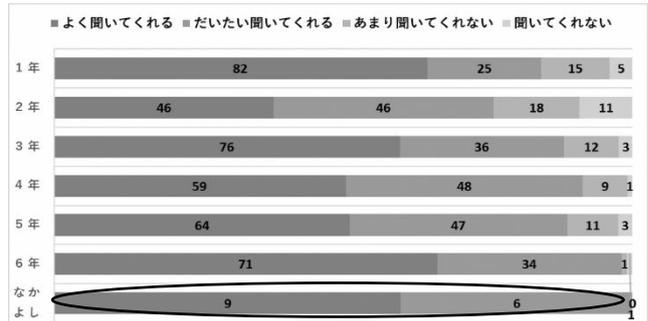
分析・なかよし学級

○良いところ

【R1⑦】

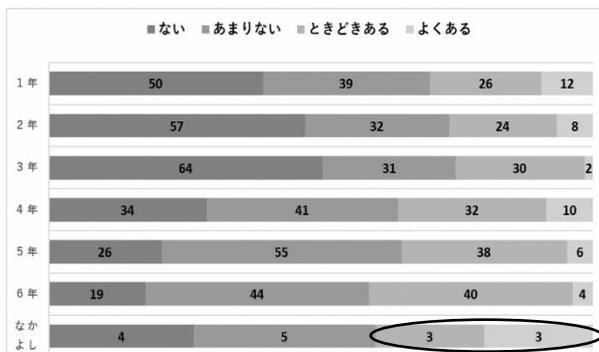


【R1⑪】



なかよし学級については①、②の項目から、自分には良いところがあり、また良いところを伸ばそうとしている児童が多い。友だちに関する項目では、④、⑥、⑦、⑪のいずれも肯定的な答えが多く、困った時には話をきいてもらっているという実感があり、小集団の中では困っている友達に、自分から行動を起こせる子も多い。

◇今後の課題



⑤の友だちが嫌な気持ちになることを言った事や、したことがあるがある児童も半数以上いて、友だちを大切に思う気持ちがあっても、実際の行動では自分の感情が優先してしまう姿が浮き彫りになった。感情のコントロールについてもくり返し練習をしていく必要がある。

アンケートを実施して

2年間、取組に対する評価の一つとして同項目で意識調査を実施し、児童の実態や変容をとらえてきている。この意識調査を通して、全教職員が実態や変容を共通認識できた。具体的な児童の姿としては、高学年が授業内外に関わらず、進んで低学年の世話をしたり、同学年の中でも困っている友達に声をかけたりする姿も見られるようになってきた。このように目に見える形で表れてきた成果もあるが、意識調査を実施することによって心の変容を見ることもできた。子どもたちの良い行いを広め、増やしていくために、教師はどのように子ども同士をつないでいくかをこの意識調査をヒントに考えていきたい。